白い鳥

楠山正雄

一

むかし近江国の余呉湖という湖水に近い寂しい村に、伊香刀美というりょうしが住んでおりました。

ある晴れた春の朝でした。伊香刀美はいつものようにりょうの支度をして、湖水の方へ下りて行こうとしました。その途中、山の上にさしかかりますと、今までからりと晴れ上がって明るかった青空が、ふと曇って、そこらが薄ぼんやりしてきました。「おや、雲が出たのか。」と思って、あおむいて見ますと、ちょうど伊香刀美の頭の上の空に、白い雲のようなものがぽっ

つり見えて、それがだんだんとひろがって、大きくなって、今にも頭の上に落ちかかるほどになりました。

伊香刀美はふしぎに思って、

「何だろう、雲にしてはおかしいなあ。」

と独り言をいいながら、じっと白いものを見つめていますと、それは伊香刀美の頭の上をすうっと流れるように通りすぎて、だんだん下へ下へと、余呉湖の方へと下って行きます。やがてきらきらと、湖の上に輝きだした春の日をあびて、ふわりふわり落ちて行く白いものの姿がはっきりと見えました。それは八羽の白鳥が雪のように白い翼をそろえて、静かに

舞(ま)い下(お)りて行くのでありました。伊香刀美(いかとみ)はびっくりして、

「ほう、えらい白鳥(はくちょう)だ。」

といいながら、我(われ)を忘(わす)れてけわしい坂道(さかみち)を夢中(むちゅう)で駆(か)け下(お)りて、白鳥(はくちょう)を追(お)い追(お)い湖(みずうみ)の方(ほう)へ下(お)りて行きました。やっと湖(みずうみ)のそばまで来(き)ましたが、もう白鳥(はくちょう)はどこへ行ったか姿(すがた)は見(み)えませんでした。伊香刀美(いかとみ)はすこし拍子抜(ひょうしぬ)けがして、そこらをぼんやり見回(みまわ)しました。すると水晶(すいしょう)を溶(と)かしたように澄(す)みきった湖水(こすい)の上に、いつどこから来(き)たか、八人(にん)の少女(おとめ)がさも楽(たの)しそうに泳(およ)いで遊(あそ)んでいました。

少女たちは世の中に何にもこわいことのないような、罪のない様子で、きれいな肌を水の中にひたしていました。伊香刀美は「あツ。」といったなり、見とれてそこに立っていました。するとどこからともなくいい香りが、すうすうと鼻の先へ流れてきました。そして静かな松風の音にまじって、さらさらと薄い絹のすれ合うような音が、耳のはたで聞こえました。

　気が付いて伊香刀美が振り返ってみますと、すぐうしろの松の木の枝に、ついぞ見たこともないような、美しい真っ白な着物が掛けてありました。伊香刀美はふしぎに思って、そばへ寄ってみますと、美しい

着物はみんなで八枚あって、それは鳥の翼をひろげたようでもあり、長い着物のすそをひいたようでもありました。それがかすかな風に吹かれては、音を立てたり、香りを送ったりしているのです。

伊香刀美はその着物がほしくなりました。

「これはめずらしいものだ。きっとさっきの白い鳥たちがぬいで行ったものに違いない。するとあの八人の少女たちは天女で、これこそ昔からいう天の羽衣というものに違いない。」

こう独り言をつぶやきながら、そっと羽衣を一枚取り下ろして、うちへ持って帰って、宝にしようと思い

ました。でも水の中に居る少女たちがどうするか、様子を見届けて行きたいと思って、羽衣をそっとかかえたまま、木の陰にかくれて見ていました。

八人の少女たちはややしばらく水の中で、のびのびとさも気持ちよさそうに、おさかなのように泳ぐ形をしたり、小鳥のように舞う形をしたりして、余念なく遊び戯れていましたが、やがて一人上がり、二人上がり、松の木の下まで来ると、てんでんに羽衣を取り下ろしては、体にまといました。そして一人一人、ぱあっと羽衣をひろげては、舞い上がっていきました。

とうとう七人まで、少女たちはみんな白鳥になっ

て空の上に舞い上がりましたが、いちばんおしまいに上がって来た八人めの少女が、見ると自分の羽衣は影も形も見えません。松風ばかりがさびしそうな音を立てていました。少女はその時、

「まあ、わたしの羽衣が。」

といったなり、あわててそこらを探しはじめました。もうその時には、仲間の少女たちは、七人とも空の上に舞い上がって、見る間に、ずんずん、ずんずん、遠くなっていきました。

「まあ、どうしましょう。羽衣がなくなっては、天へは帰られない。」

と少女はくらい目をして、うらめしそうに空を見上げました。青々と晴れた大空の上に、ぽつん、ぽつんと、白い点々のように見えていた、仲間の少女たちの姿も、いつの間にか、その点々すら見えないほどの遠くにへだたって、間には春の霞が、いくえにもいくえにも立ち込めていました。

「天にも帰られない。地にも住めない。わたしはどうしたらいいのだろう。」

と、羽衣をなくした少女は、足ずりをして嘆いていました。さっきからその様子を陰でながめていた伊香刀美は、さすがに気の毒になって、のこのこはい

出(だ)して来(き)て、

「あなたの羽衣(はごろも)はここにありますよ。」

といいました。

だしぬけに声(こえ)をかけられて、少女(おとめ)はびっくりしました。それから人間(にんげん)の姿(すがた)を見(み)ると、二度(ど)びっくりして、あわてて駆(か)け出(だ)そうとしました。しかしふと伊香刀美(いかとみ)の小(こ)わきにかかえている羽衣(はごろも)を見(み)ると、急(きゅう)に生(い)き返(かえ)ったような笑顔(えがお)になって、

「まあ、うれしい。よく返(かえ)して下(くだ)さいました。ありがとうございます。」

といいながら、手を出(だ)して羽衣(はごろも)をうけ取(と)ろうとしま

した。けれど伊香刀美はふと羽衣をかかえていた手を、うしろに引っ込めてしまいました。

「お気の毒ですが、これは返すわけにはいきません。これはわたしの大事な宝です。」

といいました。

いったん気の毒になって、羽衣を返そうと思った伊香刀美は、急にまたこのきれいな少女が好きになって、このまま別れてしまうのが惜しくなったのでした。

「まあ、そんなことをおっしゃらずに、返して下さいまし。それが無いと、わたしは天へ帰ることができません。」

と少女(おとめ)はいって、はらはらと涙(なみだ)をながしました。

「でもわたしはあなたを天(てん)へ帰(かえ)したくないのです。それよりもわたしの所(ところ)へおいでなさい。いっしょに楽(たの)しく暮(く)らしましょう。」

と伊香刀美(いかとみ)はいいました。そしてずんずん羽衣(はごろも)をかかえたまま向(む)こうへ歩(ある)いていきました。少女(おとめ)はしかたがないので、悲(かな)しそうな顔(かお)をして、後(あと)からついていきました。

少女(おとめ)は羽衣(はごろも)にひかれて、とうとう伊香刀美(いかとみ)のうちまで行きました。そして伊香刀美(いかとみ)といっしょに、そのおかあさんのそばで暮(く)らすことになりました。でも始終(しじゅう)

どうかして天に帰りたいと思って、折があったら羽衣を取り返して、逃げよう逃げようとしました。伊香刀美も少女の心を知っているので、羽衣をどこかへしまったまま、少女の目にはふれさせませんでした。少女は毎日のように空をながめては、人しれず悲しそうなため息をついていました。

二

そうこうするうちに三年たちました。

ある日伊香刀美は、いつものように朝早くりょうに

出かけました。少女は伊香刀美のおかあさんといろいろ話をしているついでに、ふとおかあさんが、

「まあ、お前がここへ来なすってからもう三年になるよ。月日のたつのは早いものだね。」

といいました。少女はそっとため息をつきながら、

「ほんとうに早うございますこと。」

といいました。

「お前、今でも天へ帰りたいだろうね。」

「ええ、それははじめのうちはずいぶん帰りとうございましたが、今では人間の暮らしに慣れて、この世界が好きになりました。」

と答えながら、何気なく、

「そういえば、おかあさん、あの時の羽衣はどうなったでしょうね。あれなり伊香刀美さんにおあずけしたままになっておりますが、長い間にいたみはしないかと、気にかかります。おかあさん、あの、ちょいとでよろしゅうございますから、見せて下さいませんか。お願いです。」

といいました。

おかあさんは伊香刀美から、どんなことがあっても少女に羽衣を見せてはならないと、かたくいいつけられていましたから、強く首を振って、

「それはいけませんよ。」

といいました。

「なぜ、いけないのでしょう。」

と少女は子供らしい目をくりくりとさせて、さもふしぎそうにたずねました。

「だって羽衣を見せると、それを着て、また天へ帰ってしまうでしょう。」

「まあ、わたくし、人間の世界がすっかり好きになったと申し上げたではございませんか。おかあさん、お願いです、ほんの一目見ればいいのですから。」

と、少女はしきりとおかあさんに甘えるように頼ん

でいました。そのかわいらしい様子を見ていると、おかあさんは、何でもそのいうとおりにしてやらなければならないような気がしてきました。

「ではほんのちょいとですよ、伊香刀美にはないしょでね。」

　とおかあさんはいいながら、戸棚の奥にしまってある箱を出しました。少女は胸をどきつかせながらのぞき込みますと、おかあさんはそっと箱のふたをあけました。中からはぷんといい香りがたって、羽衣はそっくり元のままで、きれいにたたんで入れてありました。

「まあ、そっくりしておりますのね。」

と少女は目を輝かしながら見ていましたが、

「でも、もしどこかいたんでいやしないかしら。」

というなり、箱の中の羽衣を手に取りました。そしておかあさんが「おや。」と止めるひまもないうちに、手ばやく羽衣を着ると、そのまますうっと上へ舞い上がりました。

「ああ、あれあれ。」

と、おかあさんは両手をひろげてつかまえようとしました。その間に少女の姿は、もう高く高く空の上へ上がっていって、やがて見えなくなりました。

帰って来て伊香刀美はどんなにがっかりしたでしょ

う。三年前に湖のそばで少女がしたように、足ずりをしてくやしがりましたが、かわいらしい白い鳥の姿は、果てしれない大空のどこかにかくれてしまって、天と地の間には、いくえにもいくえにも、深い霞が立ち込めたまま春の日は暮れていきました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。